

# 芸術の境界が消える

－映像インスタレーションのゆくえ－  
Boundaries between Art Disappear  
－The possibility of the Image Installation－

高田 哲雄\*  
Tetsuo TAKADA

## 【はじめに】

2008年5月12日、20世紀のアメリカの前衛作家、ロバート・ラウシェンバーグ(注1)がこの世を去った。彼の作品「モノグラム」は余りにも有名であるが、この作品が、何を意味しているのか明解に説明できる人は少ないだろう。世紀末文明の象徴である車のタイヤを身にまとっているのはSheepではなくGoatのようだ。マタイによる福音書でSheep(羊)はクリスチャンを、Goat(山羊)はノン・クリスチャンを意味しているらしい。このことをラウシェンバーグが最初から意識して制作したと考えるのは私だけだろうか？

今回は筆者自身が近年取り組んできたインスタレーション作品を紹介しながら、“芸術というものの境界”の存続についても推論して見たい。

## 【前衛芸術はどこへ】

芸術表現の可能性の追求を考えるなら、そもそも芸術の目的は感情と理性を含む「意味の関係性」を伝える側面があるということにも注目しなければならない。

「芸術」または「芸術らしさ」という既存概念の枠組みの中で考えるからむしろ「芸術の意味」が見つかれないということによくある。「芸術」または「芸術らしさ」という枠組みを超えてこそ真の芸術が発見されるのである。このことを裏付けるようにかつて岡本太郎は次のように言っている。(注2)

『フランス革命の後、19世紀に入ると、時代を支配する市民階級の気分を反映して、前の章でお話したとおり、ごく身ぢかな自然を題材とした自然主義がおこってきます。表現も市民生活に密着した、現実的なものにかわってき、また印象派、および新印象派のような、より科学的な意図から絵画を分析し創造するという努力があらわれています。これは、もちろん近代的な生産様式と勃興期の自然科学に影響を受けているものです。

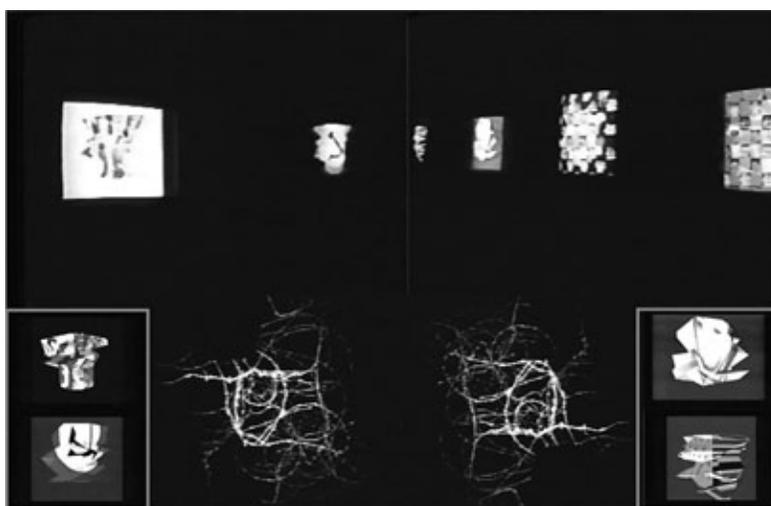
20世紀には、素朴な科学主義をのり越えた、より高度な宇宙観にあい応じて、自由に構成され、抽象化された新しい芸術形式が現れてきます。このように、芸術はあらゆる時代にそれぞれ、異なった形式と使命を持っているので、芸術形式の絶対性とか不変性などというものはありません。

ルネサンスの有名なダヴィンチの絵がいかにすばらしくても、ゴッホ、セザンヌがどれほど結構でも、今日われわれが彼らの作品と同じようなものを描いたりしたら、どんなにバカバカしくってグロテスクなことか、だれでも当然判断できることと思います。つまり、「八の字」の喜劇です。ところが、この時代錯誤的な仕事をやる方が正統であり真面目だと思われ、権威になっているから困るので。一つの時代には、一定の芸術の課題があります。20世紀も後半にいたった今日、われわれにはわ

\* 文教大学情報学部教授

れわれに与えられた当面の問題があり、それは当然それにふさわしい新鮮な形式によって解決されなければならないのです。もちろん、絵画ばかりではなく、建築についても、音楽・文学、その他すべてのものについても、みな同じことが言えるのです。』

20世紀のミッド・ポイントにおいて、すでに岡本太郎がこのような大胆な主張していたということは注目すべきであろう。"芸術"という枠組みに対していかに"変容性"を認めていたかということの分かり易い説明であることは否定できない。あえて説明するまでもないが、岡本太郎の言葉を引用したからといって、筆者の考え方がその主張のすべてに一致すると言っているわけではないということはこちらで断っておきたい。感情の赴くまま“自由の表現”を行動化し、ありのままの自分を描き出すことは“精神を解放する”ことに意味があるとしても、それだけが“芸術の真の姿”という訳でもないからである。



CGインスタレーション作品(注3)

例えばハンス・ゼードルマイヤーは、同じく「芸術」の枠組み、すなわち今日的芸術に対して次のような警告文を発している。(注4)

『人間精神の重心を非有機的なものへ移すこと—非有機的なものへ<関与>させること—がそれゆえ、宇宙的な障害であることは疑いをいれないところである。今や人間は、有機的生命と精神の生活に対処する、あの精神的な器官と能力を減殺して、反対に非有機的な世界の性格から成長した、あの精神能力を一面的に発展させることとなるのであり、それは人間という小宇宙における一つの障害であり、そこには直感的、全体的、観相学的、象徴的認識の衰えが認められる。同時に一方の極では、自然という大宇宙の状態における一つの障害がみとめられる。すなわちそれは、あらゆる生活領域において、全力を尽くして、非有機的なものを一面的に保護し、宣伝することから生まれた障害で、ほとんど生の<荒廃>にまで達するほど有機的なものを犠牲として—例えば人間を養っている大地の文字通りの荒廃に見られるように—、また本来の精神的なものを犠牲として、これをも<荒廃>に帰せしめることとなるのである。』



ビデオ・インスタレーション作品(注5)

そして結局、存在のより高次のあり方たる実在を否定して、人間を非有機的な領域に固定することとなるのである。したがって、最も本質的な問題—そこにこの研究の頂点があるわけだが—は、芸術の諸象徴にすくえてみえている人間の現在の状態が一つの障害を意味するものであること、及び、この障害が中央では一つの宇宙的、人間的な障害であり、周辺では社会的、経済的、文化的な分野における障害であることを、洞察することにあるのである。



CG映像インスタレーション作品(注6)

障害は、非有機的世界の探究に向かうことや、その結果という単なる事態にあるのであるのではなく、この探究に向かうことが、より高次の存在層に照応するあの人間の精神力の調和にある限界によって調整されていなかったところにこそ障害が存するのである。ちょっと歴史的なものに目を向けてみよう。レオナルドのような人にもまだこの均衡は存している。かれにあっては、要素の世界や技術上の発明や機械などについての関心も、まだ有機的な自然とか芸術や精神の世界についての同じように強い関心と均衡化を保っていた。

だから診断—近代芸術の象徴的観察は必然的にこの診断へ導かれる—の結果が形式的には<中心の喪失>だとすれば、内容的には、人間の高次の精神形式を犠牲にした低次の精神形式の肥大である。』

### 【未来芸術の行方】

この二つの視点からもわかるように、現代芸術は周辺に向かいつつあるともいえるが、あながち中心への求心力そのものを否定しているとも言い切れない。この荒廃した現実の姿を直視することによって逆にわれわれが失い、そして見過ごしてきた本来の芸術的中心、否人間的中心をその反証として描き出すことも可能なのである。筆者自身の主張は、芸術そのものが“中心とその具体としての周辺”という関係性の中に存在すると考えるのである。

冒頭に紹介したラウシェンバーグの作品「モノグラム」(注7)はGoat(山羊) = ノン・クリスチャンが現代文明の象徴である車のタイヤを周辺、つまり身にまとして作品の中心つまり人間自身の存在として私達に何かを訴えている。

一見、無法則であるかのようにも受けとめられる現代芸術ではあるが、その根底に一筋の脈絡を発見することができる。この推察は今日に至るまでの“芸術家列伝”によるものではなく、また過去の作品の系統的な“美的研究”でもない。実制作と思考活動の両側面から研究を続けてきた私自身の現在における“経験的直感”に基づくものである。今回は“映像インスタレーション”表現の可能性を探るためにその前提である現代芸術について模索したが、来たるべき未来芸術の方向性を暗示するに止めたい。

表現の価値や意味を更に掘り下げるならば、心理学や哲学、さらには社会学および歴史学などに渡る領域を超えた新たな体系学が必要になるだろう。このことは単に芸術領域からの探求としての課題ではなく、おそらく現代におけるあらゆる学問領域で到達している“限界状況”なのではないだろうか。とはいえ今回本稿が、少なくともその解決の鉅脈を発見するための一助となれば幸いである。

終わりに、視点を拡大するためにマーシャル・マクルーハンの一節を引用する。(注9)

「新しい技術に打ちのめされた犠牲者たちは、芸術家というものは非实际的で、空想的な趣味しかもたないと、異口同音にきまり文句をつぶやいてきた。しかし、ウィングム・ルイスが次に指摘したことは、すでに前世紀において一般的に認識されていたことである。『芸術家だけが、現在というものの本



映像インスタレーション作品(注8)

質を認識しているのです、いつでも未来についての詳細な歴史が書けるのだ。』」

## 注

- 1 Robert Rauschenberg, 1925年10月22日生まれ
- 2 「今日の芸術」岡本太郎, 光文社1954年9月発行51ページ, —芸術は常に新しい—より引用
- 3 高田哲雄作品: 1991年4月京都新聞ギャラリー, 高田哲雄CGアート個展より3 DCGを駆使し、形態の推移(モーフィング)による抽象的な映像と有刺鉄線、ストロボ装置による刺激的な発光を組み合わせ、湾岸戦争の意味を暗示したもの。
- 4 「中心の喪失」ハンス・ゼードルマイヤー 阿部公正訳 1974年 美術出版社206ページ
- 5 高田哲雄作品: 1991年10月京都市美術館, 日韓現代芸術交流展より「第7の封印」40cm四方の鏡3枚で、モニターを囲み、外観を航空貨物の様に仕上げ、内部に幻想的な映像万華鏡を見せる。
- 6 高田哲雄作品: 2004年6月国際アジア現代美術展「纏れ」フジテレビジョン賞  
ネイルアートの代わりにCG映像を組み込んだ彫刻的インスタレーション
- 7 1955~59 Moderna Museet, Stockholm
- 8 2007年6月国際アジア現代美術展, 映像インスタレーション作品「想間灯」
- 9 ハーバート・マーシャル・マクルーハン (Herbert Marshall McLuhan)  
『人間拡張の原理』メディアの理解  
(後藤和彦・高儀進訳/1967年竹内書店) P85より